

チャレンジ！！オープンガバナンス 2016 市民／学生応募用紙

地域課題タイトル (注)	No.	タイトル	自治体名
	(事務局用)	震災画像オープンデータとアプリを活用した減災教育の伝承	神戸市
アイデア名 (公開)	震災非経験世代による語り継ぎ教育の導入と震災関連アーカイブの再構築		

(注) 地域課題タイトルは、COG2016 サイトの中に記載してある応募自治体の地域課題名を記入してください。

1. 応募者情報

チーム名 (公開)	震災タイムスリップウォーク		
チーム属性 (公開)	<input type="radio"/> 1. 市民によるチーム <input type="radio"/> 2. 学生によるチーム <input checked="" type="radio"/> 3. 市民、学生の混成によるチーム		
代表者情報	氏名 (公開)	山本舜一	

※ 公開条件について

次ページ以降の「2. アイデアの説明」でご記入いただく内容は、内容を確認した上で、クリエイティブ・コモンズの CC BY (表示) 4.0 国際ライセンスで、公開します。ただし、申請者からの要請がある場合には、CC BY-NC (表示—非営利) 4.0 国際ライセンスで公開しますので、申請の際にその旨をお知らせください。いずれの場合もクレジットの付与対象は応募したチームの名称とします。

(具体的なライセンスの条件につきましては、<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/legalcode.ja>、および、<https://creativecommons.org/licenses/by-nc/4.0/legalcode.ja> をご参照ください。また、クリエイティブ・コモンズの解説もあります。<https://creativecommons.jp/licenses/>)

(注意書き)

<応募の際のファイル名と送付先>

1. 応募の際は、ファイル名を COG2016_応募用紙_具体的チーム名_該当自治体名にして、以下まで送付してください。東京大学公共政策大学院の COG2016 サイトにある応募受付欄からもアクセスできます。 admin_padit_cog2016@pp.u-tokyo.ac.jp

<公開非公開など>

2. アイデア名、チーム名、チーム属性、代表者氏名、「アイデアの説明」は公開されます。
3. 上記の公開は、内容を確認した上で行います。(例えば公序良俗に違反するもの、剽窃があるものなどは公表いたしません)
4. この応募内容のうち、「審査項目自己評価」は、非公開です。なお、内容に優れ今後の参考になりうると判断したものは、公開審査後アドバイスの段階で相談の上公開することがあり得ます。
5. 「アイデアの説明」中に、文章、写真、図画などで応募したチーム以外に知的所有権が属する箇所がある場合には、法令に従った引用や知的所有権者の許諾を得るなどをした旨をそれぞれ注として書いてください。「審査項目自己評価」中も同様でお願いします。

<チームメンバー名簿>

6. チームメンバーは別紙のエクセルファイルに記載して提出してください。(2. の扱いによる代表者氏名を除き、他のメンバーに関する情報は COG 事務局からは非公開です。詳細は別紙をご覧ください。)

2. アイデアの説明（公開）

データや資料を活用して課題の具体化とその解決につながるアイデア（公共サービス）のストーリーを語ってください。

(1) アイデアの内容（公開）

アイデアは、だれがする、何を、どこでする、いつする、どのようにするものなのかを考えて、各要素を入れて内容を描きストーリーを整理していくとよいでしょう。以下の欄内でご記入ください。（必要に応じて図表を入れても構いません）

以下の2つのことを提案する。

★震災非経験世代による語り継ぎ教育の導入

<語り継ぎ教育>

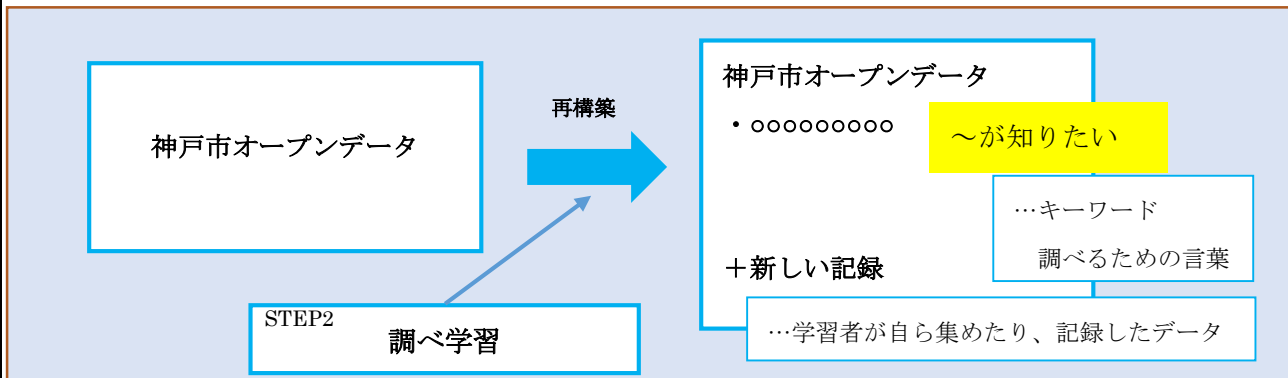
STEP1	STEP2	STEP3
アプリを使ったまち歩き学習	調べ学習	語り継ぎ実習
アプリ「1.17メモリアル」を使い、阪神・淡路大震災の当時から復興までの記録を実際の場所に行き、閲覧します。	神戸市オープンデータを閲覧し、また、震災経験者や復興事業者の方からお話を聞いて、知識をより深めます。	阪神・淡路大震災から学んだことを基に、自分たちが伝えたいことを言葉にして、実際に他者に語り継ぎをします。

対象：阪神淡路大震災を経験していない世代

神戸市内の高校生を対象に実施していく。小学校高学年から中学生にも広げていく。

将来的に、神戸市外からの修学旅行生を対象とした阪神・淡路大震災の学習カリキュラムにも応用する。

★震災関連アーカイブの再構築



<現在>

神戸市の震災関連アーカイブは、当時の資料のままで整理されている。しかし、学習者が自分の知りたい情報がどこを見れば調べられるか分かりにくい状態である。また、オープンデータでは、網羅できていない記録がある。

<提案>

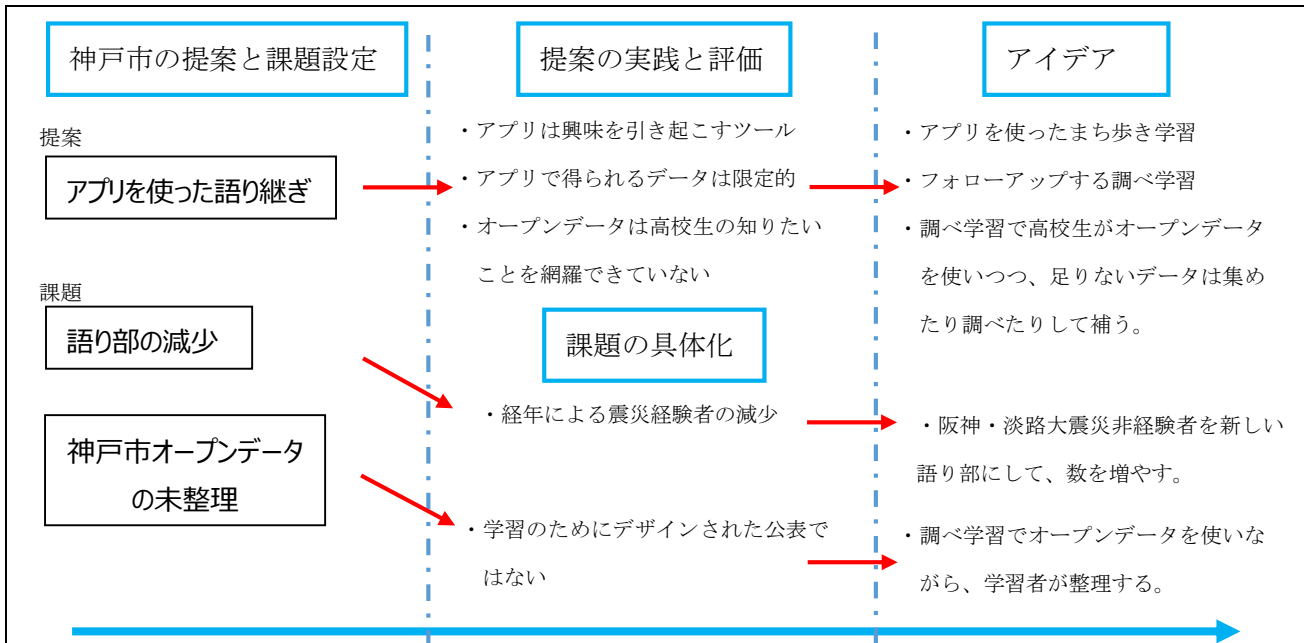
「学習者自身が、学習者が調べやすいアーカイブに整理しなおす。」

「震災非経験世代による語り継ぎ教育の導入」で提案した、調べ学習の際に、神戸市のオープンデータを積極的に使う。その際に、学習者の知りたいことと該当資料とをマッチアップさせるために神戸市の職員の方にガイドとして参加してもらう。その後、知りたいこととオープンデータ（答え）までの道のりを残す。（後続の学習者が検索しやすくなるように）または、オープンデータのタイトルに「～が知りたい」などとラベルを貼り付けて、学習者の興味と資料が包括する内容が一目で一致するようにする。

学習者の知りたい内容がない場合、学習者は自分で調べ、オープンデータにデータを追加する。

(2) アイデアの論拠（公開）

アイデアの論拠（なぜこのアイデアにするのか）を、それをサポートする数値データ（実績、統計やアンケートなど数字であらわされるもの）や証拠（資料や計画、既存の施策など）（以下：総称して「データ類」といいます）などを含めつつご記入ください。数値データや証拠は出所を明らかにしてください。以下の2ページの欄内におさまるようお願いします。



神戸市の提案と課題設定

震災画像オープンデータとアプリを使った減災教育である。

提案の実践と評価

本年度は、神戸市の提案を受け、神戸市立神港高校生の授業の一環として、それを実践及び評価した。

何をしたか？

神戸市立神港高校の情報処理科3年生こべこマップ班13名を対象に3コマの授業（各50-70分）を実施した。

- 1 コマ目：アプリを使ったまち歩き学習（学習中に学んだことでクイズを作成し、学習後アンケートに答えた。）
- 2 コマ目：語り部による講義（学習後アンケートに答えた。）
- 3 コマ目：ワークショップ（1コマ目と2コマ目を基に「もっと知りたい！」「私たちが伝える！」をテーマにして話し合った）

どうだったか？

まち歩き後に実施したアンケート結果より、阪神淡路大震災に、少し興味があった人やあまり関心がなかった人が、まち歩き後に、阪神・淡路大震災についてもっと知りたいと思うようになった。また、まち歩きの際に、アプリを使って高校生は学習したことに関してクイズを作った。その結果から、アプリで学ぶことのできる内容は現在では、視覚的な違いに限定したものであり、その変化の原因や背景等を学習することができないことが分かる。

ワークショップでは、「仮設住宅での暮らしについて知りたい」という意見があった。神戸市のオープンデータには数値などのデータはあるが、個々人の経験や記憶は記録として残っていないということを神戸市職員の方から回答をいただいた。

どうすればよいか？

以上より、アプリを使ったまち歩きは現段階では、阪神・淡路大震災を深く知るツールにはなりえていないが、学習者の興味を喚起する、学習の初期段階のツールとして、適していると考えられる。よって、アプリを使ったまち歩き学習を第一段階として、カリキュラムに盛り込む。また、興味を持った学習者は、より深く阪神淡路大震災を学ぶために、まち歩き後のフォローアップ学習が必要である。



高校生ワークショップのまとめ

課題の具体化

課題 1：語り部の減少

震災経験者の減少は、震災から22年が経とうとする中で、転出や志望等により、震災を経験した人口が減っているのに加え、経験者の高齢化により積極的な語り部活動ができる人が減ってきている。これらは経年によるものであるから、減少をとめることはできない。

震災非経験者が、阪神・淡路大震災を学び、**新しい語り部となり、その数を増やす**必要がある。

それには、阪神・淡路大震災を学校教育の中にもっと積極的に取り組むべきであり、また少なくとも関心を起こさせる教育を取り入れていくべきである。

どうすればよいか？

阪神・淡路大震災を経験していないが、これらの学習カリキュラムを受けた学習者を次世代の語り部とすることで、語り部の数を増やすことである。そのために、語り継ぎの実践の機会を与え、学習者が将来に、阪神・淡路大震災から学んだことを伝え、生かす勇気を与えることが必要である。

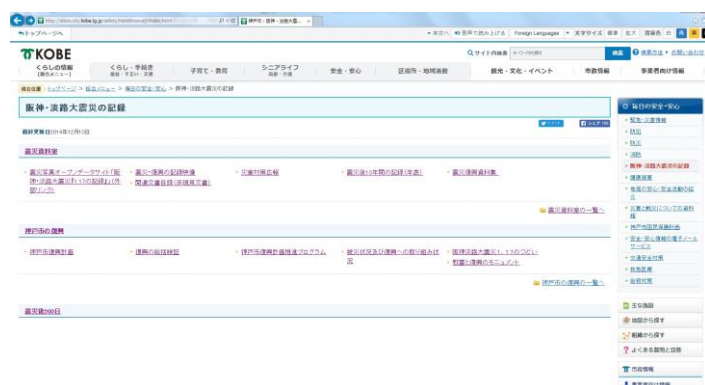
課題 2：神戸市のオープンデータの未整理

整理はされているが、学習者の閲覧のことが考慮されたデザインではない。

例えば、学習者が、「震災前の道路幅員が知りたい。」といて、オープンデータにアクセスした際に、答えまでたどり着くことは難しい。なぜなら、神戸市のデータ公開の仕方が、当時の資料をそのままの名前をファイル名としてリンクを張っているからである。ましては、高校生以下の学習者が、専門的な用語でカテゴライズされたファイルと、自分の知りたい情報を結びつけることは、時間がかかることである。

どうすればよいか？

アクセス数が少ないことは、神戸市ホームページの閲覧者数のデータより分かる。その理由として、高校生が、調べ学習で神戸市のデータにアクセスする。そのときに、市の職員が、ガイドとなり知りたい情報が得られる資料の場所を高校生に教える。調べてわかった後、高校生は、「知りたいこと」と「資料」を結びアクセスの軌跡を記録に残す、もしくは、「～が知りたい」というラベルを「資料」に貼り付ける。



神戸市ホームページ

阪神・淡路大震災に関心をもつ学習者を育てる。

阪神・淡路大震災に触れる機会を作り、そこから、知りたいから調べるというプロセスを踏ませる。高校生が学習している中で、神戸市のデータでは解決できない、疑問等が生まれる。これらは、減災・復興教育の抜け落ちていた情報であるから、補うべきである。震災経験者や当時の復興計画に携わった人が存在する今のうちに、記録を新たにとる。その際に、高校生が直接当事者に会いに行き、話し手の熱を感じながら記録することが効果的なアーカイブ作りとなる。**(学習者が自ら作る学習の教材である。)**

(3) アイデア実現までの流れ（公開）

アイデアを実現する主体、アイデアの実現にいたるプロセスとマイルストーン等、アイデア実現までの大まかな流れについて、以下の欄内におさまるよう、簡潔にご記入ください。（必要に応じて図表を入れても構いません）

H27 年度（昨年度）の取り組み

神戸市兵庫区川池地区にある神戸市立神港高校情報処理科 3 年生こべっこマップ班 8 名を対象に、アプリと語り部と一緒にまち歩き学習を行った。彼らは 17-18 歳であり、震災はまだ生まれていない世代である。自分たちの普段の通学路が震災の時にどのような様子であったかをアプリを用いて写真やビデオを見ながら、疑似体験した。

H28 年度（今年度）の取り組み

昨年度に引き続き、神戸市立神港高校情報処理科 3 年生こべっこマップ班 13 名を対象に授業を実施した。（高校生は、昨年とは全く入替っている。）今年度は、本アイデアの前半部分であるまち歩きによる阪神・淡路大震災に触れるまち歩き授業、学習を深める震災体験者による講義、そして、高校生が講義を受けて自分たちがどのように感じて、何をしていきたいかをまとめるワークショップを行った。



アプリを使ったまち歩き（2016.10.24）



震災経験者による講義（2016.10.31）



ワークショップ（2016.11.14）

H29 年度（来年度）の取り組み予定

1. 神戸市立神港高校の高校生との実施

今年度の活動を踏まえて出たアイデアを実践する。まち歩き学習・ワークショップ後に、神戸市の震災関連アーカイブを実際に用いて、調べ学習を高校生がする。そして、調べ学習の一つの目標設定として、高校生は自分たちが学んだことと感じたことを、次のさらに若い世代に語り継ぐことをする。

2. 兵庫県立舞子高校の高校生との実施「被災地外の高校生に対するの伝承教育の実施」

今年度実施した神港高校生が通学する川池地区は、阪神・淡路大震災の際に、まちの 80%以上が焼失し、100 名もの死者を出した地域である。兵庫県立舞子高校は神戸市内にあるが、その周辺は、阪神・淡路大震災では、あまり大きな被害が見られなかった地域である。舞子高校生に対しては、自分たちの校区ではない、阪神・淡路大震災で被害が大きかった地域でのまち歩きを実施する。

→ 普段、見慣れないまちから阪神・淡路大震災当時への疑似的なタイムスリップが有効に働くかを検証する。

H30 年度以降の取り組み予定

1. 神戸市内にある小学校～高等学校に対して実施していき、学習者の数を増やしていく。

小学校、中学校、高校と段階的に学習していくカリキュラムの検討をしていく。

高校生よりも若い世代に対する伝承教育の方法を検討していく。

2. 神戸市外からの学習者が神戸市にて、震災タイムスリップウォークを実施する。

修学旅行生や旅行客を対象とする震災伝承教育ツアーを想定して計画する。

現在の神戸のまちを初めてみる人でも、震災当時の写真や動画を効果的に使って学習する方法を検討する。

(4) そのほか（公開）

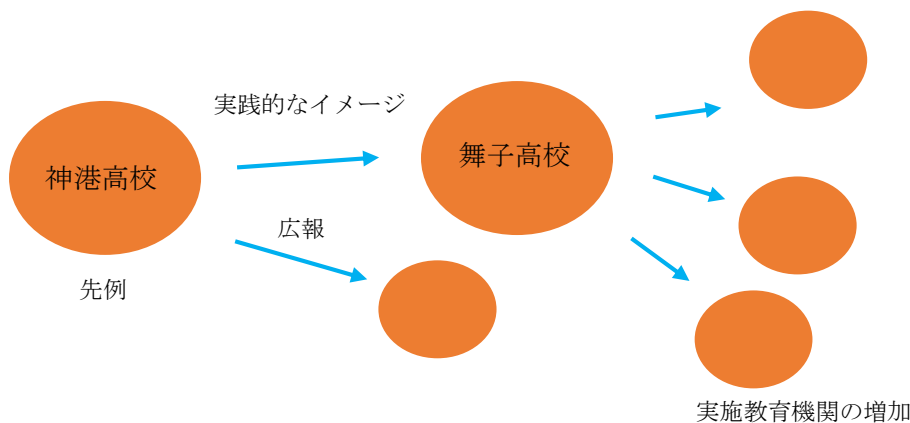
アイデアのアピールポイントや、アイデア実現に当たっての制約があればそれとその当面の解決方法、さらに将来の発展可能性（例えば「将来的に xx という制約をクリアできれば、追加で○○ということが実現できる」など）について、以下の欄内におさまるよう、簡潔にご記入ください。

アイデアのアピールポイント**★実践に基づいて、アイデアの妥当性を考えている点**

本アイデアの実現の可能性や課題解決のために、神戸市立神港高校に理解・協力を得ながら、プロジェクトとして進めている。アイデアの対象者である、阪神・淡路大震災の経験していない世代と一緒にアイデア実現の方法を模索することは、今後導入段階の先例を示すこともできる。

★次年度の参加に興味を示している高校があり、今後活動が拡大する将来性がある点

本活動が、先に述べたように、実例をともなったアイデアであることから、それを見て実施したいと考える教育機関にとって実施時のイメージを持つことができ、比較的受け入れやすいアイデアであるといえる。今後、参加する教育機関の増加により、様々な実例ができ、多様な教育機関での実施が実現することが考えられる。

**アイデアの実現に当たっての制約と将来の発展可能性****★現在、学校教育における「防災教育」に割り当てられた時間が制約である。****★学校教育の枠組みを超えて、地域課題として地域が取り組んでいく。**

小学校、中学校、高等学校という学校教育に留まらず、生涯学習ととらえ、さまざま世代が参加する地域での活動となれば、授業時間といった制約はなくなる。また、今後起こりうる災害に対して、避難や共同生活の単位となる地域で学ぶことは、より災害に強いまちづくり・地域づくりに寄与するものである。